

この時期、前述のように会津藩の財政及び南山領民の生活は、困窮を極めていた時期であり、まして一度に百人以上の接待は間に合わなかったと思われる。しかし、鯉、鮒は、たまたま食膳に付かなかつただけで、これらは当地方でも古くから食されていたと文献には残る。

次に嘉永4年（一八五二）の吉田松陰の通行である。この旅行記も「東北遊日記」として纏められている。

「二九日微雨。七日町を発し、高津へ抵り別れを告ぐ。湯川橋を渡る。湯川は古は黒川と称す。平蔵の縮川と號するも、此の名の原づくなり。飯寺を過ぎ、本郷村に至る。村は陶器を造り、市上に御許瀬戸捌問屋と標せるもの多し。舟にて会津川を渡る、川之下流は津川に合す。関山を経、火玉嶺を越ゆ。嶺は上下二里。大内に出て倉谷を経、檜原に至る。川を舟で渡り、長野を経、道傍に人参を植うる者あり、云わく「三年にして掘る」と。田島に宿す。戸口頗る多く、田野少しく開く、大内より五十里に至る五万五千石、会津の御預地に係り、陣屋を置く、此の地方を総称して南山という。駅傍に城址あり、昔長沼盛秀此に居り、蘆名に属せり、是の日、行程十一里、晦日は晴、駅を発す。川島を経、糸沢に至り、山王嶺を越ゆ、是れ奥野の界を為す。水脈も亦これに境し、嶺以北のものは会津川に入り、嶺以南のものは下野の鬼怒川に入るといふ。上三依、中三依を経て碓（五十里）に至る―以下略―とある。この時、吉田松陰は旅行許可証を持たぬ旅であったため、江戸帰国後その罪により萩藩に戻され閉居されている。

慶応四年、戦国時代に甲冑武者が通り抜けたこの道筋に、再び、血なまぐさい蹄の音が響き渡る。戊辰戦争である。街道筋は当然戦火の渦に巻き込まれ、多くの民家が焼かれた。下野街道筋から進軍してきた西軍本隊と松川新道から入った別隊が田島で合流し

会津若松へとなだれ込んだのである。その数は二〇〇〇人といわれ、現在も旧街道の所々には戦役で犠牲となった東西両軍の墓が建っている。

時代は明治となり、明治十一年、イザベラ・バードという英国婦人が街道を歩いている。まもなく明治十七年には会津三方道路と呼ばれる大川沿い（下郷分は松川新道）の道路が開設され、大内峠はその道筋から外れており、その点でこの旅行記「日本奥地紀行」は、下野街道の最後の状況を伝える貴重な旅行記である。この旅行記は第〇〇信と、五、六日まとめて書かれているため詳細な日程の判別は難しいが、所載の第十二信（完）を一部記してみよう。

「私は田島で馬をかえた。ここは、昔、大名が住んでいた所で、日本の町としてはたいそう美しい。この町は下駄、素焼、粗製の漆器や籠を生産し、輸出する。―中略―そして汚いが勤勉な住民のあふれている汚い村をいくつか通りすぎて、平底船で川を渡った。川の兩岸には、また木がしっかりと打ち込んであり、藤蔓を何本も結びあわせた太綱を支えている。一人は両手を使って綱をたぐり、一人は船尾で棹をさす。―中略―どの渡し場にも料金表が貼り出している。料金をとる橋の場合と同様である。事務所には男が座っていてお金を受けとる。（改段）この地方はまことに美しかった。日を経るごとに景色は良くなり、見晴らしは広々となった。山頂まで森林に覆われた尖った山々が遠くまで連なっていた。山王峠（中山峠か）の頂上から眺めると、連山は夕日の金色の霞につつまれて光り輝き、この世のものとも思えぬ美しさであった。私は大内村の農家に泊った。この家は蚕部屋と郵便局、運送所と大名の宿所を一緒にした屋敷であった。村は山にかまされた美しい谷間の中にあつた。私は翌朝早く出発し、噴火口状の